

「ほね蛍光灯 (3)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

私の幼少期の原風景の一つともいえる「ほね蛍光灯」。蛍光灯本体や点灯管の劣化によって起きる現象とわかった。次の仕事は、身近な場所(街路)で、実際に「骨化した」蛍光灯を探すことである。

東京では街路灯も急速にLED化が進んで、蛍光灯の街路灯は少なくなりつつある。幸い北軽井沢では、まだ昔ながらの蛍光灯街灯である。私は、その光に非常に心ひかれる。前世は蛾だったのかも知れない。特に雪の降る晩の街路灯は、絵の題材にもなると思う。



「雪の夜の街路灯」 2015年1月 C. Tanaka

かくして私は、浅間高原の夜道を「骨化した」蛍光灯を探しに出かけることにした。北軽井沢の道は、国道(146号線)、群馬県道、町村道、私道に分かれる。国道や県道の街路灯も蛍光灯であるが、私がいつも走る道の街路灯は、常に100%健全である。



「県道の街路灯」劣化したものはまず見当たらない。

私道には入れないし、街灯もない。ねらいは浅間高原に無数にある、長野原町道、嬭恋村道である。農道には街灯のない場所もあるが、永住者が利用する道には、間遠ながら蛍光灯の街路灯が設置されている。これを検査して回るのだ。馬鹿げた試みであるが、これも「探究心」と言えるだろう。暗夜の浅間高原を彷徨すること1時間、ついに「ほね蛍光灯」に出会えた。



激烈なる「ほね」ぶりである。私は「懐かしい」と思ったが、街路灯としては末期症状である。撮影には非常に苦労した。普通に長時間露光をすると、「ほね」に写らないのだ。幸い、夜間はまったく車が通らない道なので、絞りなどの条件を変えて何枚も撮れた。そのうちの1枚、星も写ったいい写真が撮れた。子どもの時に見た印象にかなり近い。私にとっては「傑作」である。最近、北軽井沢にもLED街灯が登場した。「ほね蛍光灯」も絶滅寸前、前世紀の遺物になりつつある。